

ほどほどに



北見医師会
介護老人保健施設 緑風

藤井 一 男

今年、年男84歳です。「少年老い易く学成り難し…」。いやいやそんな、勉強一筋に励んできた者ではありません。好きな音楽とスポーツは続けています。

昭和・戦前・戦中・戦後・平成。小学校・国民学校・中学校5年卒・入試・大学教養科2年・入試・大学医学部入学・インターン・国家試験・小児科医局入局（大学院）。敗戦後、中学3年生の時、教科書の墨での塗りつぶし。ちょうど学制改革の変わり目にぶつかり、落ち着かない日々。世の中の価値観も大きく変わり、惑わされ通してました。

この20～30年ほど、「何か変だ」とずっと違和感を覚えています。一流企業と言われる、私たちと関係深い製薬会社はもちろん、金融機関、電気、自動車業界あるいは小売業界などなど。国内外での競争に勝つためと、合併を繰り返しているのを見てきました。ついには日常私たちに必要な品物も全部言ひなりとなり、選択の余地などなくなるのか。業務は早く、販路は広く、厳しい経営でなければ生き延びていけないのでしょうか。非正規社員を増やし、ついにはブラック企業まで現れ、人件費も節約。そして世界は最先端技術、IT産業の恩恵に浴するまでになりました。恥ずかしながら、私はPCやネットも使っていない古代人ですが…。

この社会現象を納得するために、少し調べてみました。日々暮らしの中での変化について、私たちがその中にどっぷり漬かっている資本主義社会の矛盾、いやらしさ、むごさなど身をもって長年経験されたことを、ビビッドに事細かく鋭い視線と感性で描き、成長経済はもう無理で、大衆浴場に象徴される、格差も大きくなならない定常経済を求めべきであるとの意見がある。そして資本主義経済には基本的なエネルギー資源も、市場を開拓できるフロンティアも限りなく存在するとの前提が壊れ、ついには国家を超えて、金で金を買う。見せかけの成長を求め、一秒間に何万回も取引できる電子金融空間まででき、ごく少数の資本家以外は中間層も安全でいられないであろう、と。

先般亡くなられた、東大名誉教授の宇沢弘文先生は、アメリカの新自由主義経済学者フリードマン教授などの数理学経済学に対して、「人間の経済学を勧め。市場経済は格差だ。経済学の原点は人間であり心が大事だ。早くから現場へ足を運び、恵まれない

人や、被災地等を訪れては優しく慰め励まされ、権力に対する怒りが自分の原動力であり、医療・教育・福祉・自然は社会的共通資本であり、利益追求の対象であってはならない」と述べていました。

「21世紀の資本論」を書いた、フランスのトマ・ピケティ教授への日本への雑誌社による独占インタビューによると、日本を含め世界20カ国以上から3世紀にわたる「所得と資産の歴史」の本で、30人以上の研究者の協力により、15年かかりデータを集め、1年で書き上げたものである。そこでは、不平等と格差、税の問題が明らかになった。要点は次の3点
（1）不動産、債権、株などの投資によって得られる利益の成長率すなわち資本収益率は、労働によって得られる賃金上昇率すなわち経済成長率を上回る
（2）この不平等は世襲を通じて拡大する
（3）この不平等を是正するには世界規模で資産への課税が必要だ—

資産の不平等は、個人の能力に応じて報酬を受けるという能力主義の理想とは程遠いレベルで拡大する。これら富裕層の多くは、現在では大規模な多国籍企業のトップや、ウォール街の資本家で、アメリカでは上位10%の富裕層が残り90%と同じ額の所得を得ている。日本の場合は、彼の主張を裏付ける極端なもので1970年から2010年までの間で見ると、国民所得に対する民間資本の割合は、戦後の3倍から現在では6～7倍になっていて、イタリアやイギリス、フランスとかなり近い。そして中間層であっても、一度失業や病気などで簡単に貧困に陥ってしまう。これも欧米と同じだ。中間層の中途半端な資産ではほとんど利益を生まない。

さて、そのど真ん中に生きているわれわれはどうでしょう。この人間の業とも言える不平等について、誰が対応できるのでしょうか。今日の日本の首相の方針にも、大きな危険と不安を感じるのは私だけでしょうか。

小児科医を48年、老健での10年を通して学んだことは、赤ちゃんから老人まで、「すべての人は、人でなければ癒されないのではないか」ということでした。

やむなく、畑、園芸、芸術、スポーツ等の趣味や、犬や猫などのペットの飼育、そして今では人の声に反応して応える可愛いロボットまであります。

人との絆、コミュニケーションを大切にし、欲望もほどほどに、楽しみながら平穩に生きたいものと、切に願っています。

2014年11月末日

参考文献、資料

1. 平川克美「路地裏の資本論」角川SSC新書 2014
2. 水野和夫「資本主義の終焉と歴史の危機」集英社新書 2014
3. 世界 2014年8月号No. 859 「特集 新成長戦略批判」岩波書店
4. 週刊東洋経済 2014 7/26号 「『21世紀の資本

論』が問う中間層への警告」

5. フジテレビ・プライムニュース（水野和夫ほか）
2014 10/29 20:00
6. NHK・クローズアップ現代「人間のための経済学 宇沢弘文」 2014 10/30 19:30

還曆雑感 知らなかったでは 済まされない時代に

苫小牧市医師会
むかわ町鶴川厚生病院

石川典俊

末年生まれはおとなしく、周りをよく観察して慎重に行動する性格の人が多くと言われている。言葉を変えれば日和見主義とも言える。それ故、情報収集力がとりわけ重要である。昨今騒がれているTPP問題にしても「知らなかった」では済まされないのかもしれない。どこか幕末にも似て、今後子孫たちがどれほど影響を受けるであろうことか心配されているが、その内容や交渉風景は秘密裏に行われ、庶民が伺い知ることはできない。明治の混乱期、先人たちは大変な貧乏の中で西洋の文物を取り入れるために努力してきた。そして関税自主権等、自立した国家の利益を守るための権利を取り戻すためにおよそ50年を要し、多くの血や涙が流された。関税自主権が取り戻されて約100年、また国家の主権が危ぶまれている。

人は自分で考え判断しているように感じてはいるが、実はその社会や時代の風に影響を受けているものだという事は社会学の常識である。人はその時代の風を受けて、その中でしか物事を判断するしかない。文字文化が一部特権階級のものであった諸外国と違い、わが国は漢字の導入に伴い、早くから庶民にまでひらがな・カタカナが広まって、書物や文字文化に対して深い思いがある。その分、新聞テレビ等マスコミが大衆洗脳の道具でもあることには無防備でもあるといえる。実際、某大手新聞のでっち上げ記事は、長い間日本の国際的信頼を大きく傷つけ、国内政治家すらも誤解したままの状態であるらしい。時代の風を読むのは至難である。

こういう時代、私たちはあらゆるものに懐疑的にならざるを得ない。しかし、幕末日本に密航し、日本人に初めて英語を教えたというマクドナルドは、日本人を誠意の人、書物の民と書き残してくれた。世界中を旅してきたが、最も素晴らしい国と絶賛していた。あれからおよそ150年、日本のたどってきた道は険しいものであったが、世界で最も道徳心の高い国と語られるようになってきた。先人たちの苦

労も無駄ではなかったのかもしれない。万葉の時代から、家族の情愛が深く、誠を旨として生きてきた清雅なる国民性は失われてはいない。「お金で買えないものはない」のではない。むしろお金で買えないもの、目に見えないもの、お金で換算できないものに価値があるということに目覚め始めた時代でもあるかもしれない。多くの犠牲を払って手にした西洋の文物情報が、今や誰でもどこでも気軽に手に入り、むしろ日本からの情報発信が可能になった。悲観的になる必要はないのかもしれない。

かつて幕末に吉田松陰は、「世界の中で盲目のまま立ちすくんでいるような心地がする、世界中に日本人を派遣して情報を集めることができたらいい」と願っていた。声の文化から文字の文化、そして映像の文化へと変わりつつあるが、世相の変化に抗して清雅なる心は失わなかった先人たちを思う。60年生きてこられたことを感謝するのみならず、先人の思いをつないでいかねばと思う今日このごろである。

西洋のことわざに「いつまでも羊のふりをしていると狼に食べられてしまう」とある。「知らなかったでは済まされない」時代にそろそろ羊の皮は脱がねばならない。ぬくぬくと温かい毛皮ではあるが。

